

新たな華夷秩序の登場か？

(2010年11月)

column6

北陸大学未来創造学部講師
福山 悠介

東アジアの秩序は、今、「華夷秩序」の復活を迎えているようである。

華夷秩序とは近代に入るより以前において、相当長い期間、中華を中心として東アジアを構成した秩序である。この秩序は大きく2つの力からなる。現代風にいえば、1つは時の中華の帝国による軍事力と経済力というハードパワーであり、いま1つは中華の文明というソフトパワーである。

中華の帝国は、東アジア地域において圧倒的な軍事力を保有していた。全面において軍事力を用いた支配が行われていたわけではないが、こうした力を背景に政治力を行使した。周辺国の王は中華の皇帝に朝貢を行い、皇帝から承認を得ることによって地域の支配権を確立した。周辺国は中国を介することで間接的に交易を行い、また中国の貨幣は、地域の通貨としても用いられた。中国は地域の政治、経済、安全保障の秩序を形作っていたのである。

周辺国は、中華の文明を学び、自国文化の発展を期した。最新の宗教、思想、知識は中国に集まり、周辺国からエリートが留学に訪れ、そして中華の文明を自国に持ち帰った。中華の礼を学び、中華の法制度を学び、中華の社会システムの導入を目指した。中華の秩序に入るものは「文明」とされ、入らないものは「野蛮」とされた。中華は周辺にとって、「魅力」があった。

こうした硬軟両面のパワーによって、東アジアは中華による秩序が形成されたのである。

しかし華夷秩序は、西洋の衝撃によって崩壊し、東アジアは近代史へと入った。列強の軍事力、経済力というハードパワーと、近代文明というソフトパワーによって、東アジア秩序は形成された。その後、日本の台頭と敗北、東アジア各国の独立、冷戦構造を経て、東アジアの現時点に至る。現代史の中の東アジア秩序は、アメリカが提供する安全保障秩序と日本が先導した経済秩序（雁行型経済発展）というハードパワーと、西洋発の近代的な社会システム、そして American Dream や Cool Japan というソフトパワーによって形成されたとと言えるのではないだろうか。

さて、今、東アジア秩序が再び華夷秩序に戻りつつあるように見える。

中国はアメリカを除けば、この地域で最大の軍事力（核兵器を含む）を持つ。中国は軍事力を行使している訳ではない。しかし周辺国は「中国脅威論」を感じている。こうした威圧は、周辺国の政治に制限をかける。

例えば昨今の日中間の緊張は、中国は些かの武力を用いること無く、日本に圧力をかけ、政治的主張を通した。安倍首相以降、日本の首相は靖国神社に参拝することを、中国の要求を加味して、自主的な制限を余儀なくされている。中国の「気に入らない」行動は、もはや日本の政治家には為し得ないのかもしれない。韓国では、2011年11月、李大統領の北朝鮮政策を、中国の時代の指導者である習近平が批判したとの発言で国会が紛糾した。他方で、こうした力を頼もしいと感じる国もある。北朝鮮は次代の指導者を中国に第一に伝え、そして承認を受ける。ミャンマーは欧米の圧力から守ってくれる中国に依存し、自らの土地を中国が利用することを認めている。

東アジア経済は、中国の発展によって牽引されており、もはや日本の主導するところではない(もちろん、域内で日本の経済は重要な役割を占めているのは間違いないが)。かつて21世紀は「アジアの世紀」と言われていたが、今では「中国の世紀」と変わっている。「China Free」は、あらゆる面で、東アジアでは成り立たないのが現状である。ハードパワーで見ると、中国の秩序が到来しているようである。

他方で、中国は、今なお西洋発近代文明を追っている。中国の文化コンテンツは一定の評価を得ているが、未だ定着とまでは言えず、一過性の消費物に過ぎない。中国への言語、文化以外での留学生は極めて少数であり、学者の留学は地域研究の域を出ることはあるまい。またソフトパワーでは政策に関する魅力も重視されるが、領有権問題を抱える東南アジアでは中国のイメージが低下している面もある。例えば2007年12月にベトナムで反中デモが起こっている。2010年9月の尖閣問題の際には、シンガポールのThe Straits Times 紙が「日本だけでなく、東南アジアでも自らのイメージを傷つけた」と論評した(The Straits Times, 2010年9月28日付)。この視点は中国で決定的に欠けている。例えば2011年2月18日に中国社会科学院傘下の中国社会科学文献出版社が「文化ソフトパワー青書」を発表した。(しかしそのサブタイトルは、「中国文化ソフトパワー研究報告」であった。)外交防衛調査室の鎌田文彦は中国のソフトパワーについて、「きわめて『中国的特色』の強いもののように思われる」とし中国政府が文化産業に力を入れる様を描いている(鎌田文彦「中国のソフト・パワー戦略 その理念的側面を中心として」、国立国会図書館調査及び立法考査局『レファレンス』、2010年9月号)。

中国は文化コンテンツの経済効果でしかソフトパワーを測っておらず、政策の魅力という観点からはソフトパワーは捉えられていない。ソフトパワーで見れば、近い将来における中国の秩序の到来は言えそうにない。

中国は覇を称えないと言う。平和的台頭と言う。しかし周囲はそうは感じないのかもしれない。なぜならば、ハードパワーでのみ進展する華夷秩序の到来であるからだ。中国のハードパワーに怯えるか、依存するか。そういう東アジア秩序が到来しつつあるのかもしれない。

(2011年2月28日に加筆)